

月報私学

11

2015

Vol.215



昭和50年に開園した東京ゆりかご幼稚園は、豊かな自然環境を追い求め平成26年に移転しました。森、棚田、山、小川、草はらを始めとする園内外の豊かな自然と日常的に関わりながら、原体験を通して生きる力を育んでいきます。

写真提供：学校法人 東京内野学園（東京都八王子市）

CONTENTS

- 私立幼稚園の財務状況《平成25年度決算集計》…………… 2
- シリーズ学校訪問記～未来に向かって～ 第4回 地震災害に対応したBCPを考える…………… 4
- 連載③「魅力あふれる学校づくりを目指して」
豊かな自然を活かした園作り…………… 6
- 学術研究振興資金研究活動報告…………… 8
- 「ジェネリック（後発）医薬品ご利用のすすめ」を12月中旬に送付します…………… 9
- ねんきん定期便を送付します／限度額適用認定証の事前受付／
平成27年度第2回 私学共済事務担当者研修会の中止／
介護ビデオ・DVDをご利用ください…………… 10
- 年金積立金 共通財源・独自財源の概算仕分けの状況／
子ども・子育て拠出金の納付対象基準額が決定しました…………… 11
- 在職支給停止の計算方法が変更となります…………… 12
- INFORMATION…………… 14
- 宿泊施設のご案内／融資事業のご案内…………… 16

魅力あふれる学校づくりを目指して

連載 ③④ 豊かな自然を活かした園作り

学校法人 東京内野学園 理事長 内野 彰裕

理想の環境を追い求めて

東京ゆりかご幼稚園は、故内野登悦・郁子夫妻によって、清瀬ゆりかご幼稚園の姉妹園として昭和50年に東京都八王子市に設立されました。以降、それぞれの地域に根ざした教育と経営の独自性、公益性を高めるべく、各々が学校法人となり、現在に至ります。

東京ゆりかご幼稚園は、UR都市機構（旧住宅都市整備公団）の団地内にある小さな幼稚園として歩んできました。高尾山をはじめとする豊かな自然が近隣にある恵まれた地域で、小さな園庭にはそうした地域の自然を取り込みながら様々な形のピクトープを作り、園児が日常的に関わることでできる環境作りを力を入れてきました。

一方で、北欧の「森のようちえん」や日本の「里山保育」に代表されるような、園内外の屋外をより積極的に活用し、幼児が主体的に周囲の自然環境と関わりながら育つダイナミックな保育の必要性も感じていました。そして、園庭の身近な自然と園外の深い自然とを日常的に行き来できる豊かな環境こそが理想の環境であるという結論に達した。

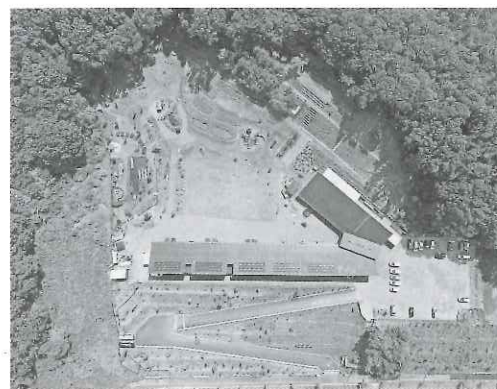


園舎全景。正門よりスロープを200m上る

しました。当時の園は、広域的には自然豊かであったと言えますが、それは団地の外のことであり、幼稚園はコンクリートの団地に囲まれていました。こうした中で、園庭での「自然豊かな環境」作りに限界を感じると同時に、園舎の耐震化の問題、園地の借地契約が更新時期であったこと、さらには団地の縮小計画による周辺環境の不安定性を勘案し、幼稚園の移転を視野に入しながら用地を探すことになりました。

移転に向けて

園児の通園範囲内で探看中、既存園から車で12分の位置にある八王子ニュータウンの片隅に、幼稚園としては広大な2・2haの用地に巡り会うことができました。ヤマザクラ、クヌギ、コナラ、エノキをはじめとする40haの落葉広葉樹林（特別緑地保全地区）に囲まれ、敷地からは鎌倉古道（七国峠）の掘割道につながり、悠久の歴史を感じさせてくれる魅力あふれる場所でした。それは正に思い描いたところの理想の環境でした。「いつか必ず園児を連れていきたい」そんな思いを胸に、5年がかりで交渉を進め、平成23年に用地を購入しました。



空撮による敷地全景。周囲は40haの落葉広葉樹林

その後、移転までの3年間は、「ゆりかごネイチャーセンター（自然体験施設）」として、園児を定期的に連れ

園庭里山化

ここは元々里山でしたが、ニュータウン計画に基づき一帯が造成され、木々も相当伐採されていました。そこで、親子で新たに大小の樹木1000本近くを植え、小川や棚田を作り、雑木林の下草を刈るなどして元の里山に戻していく「園庭里山化」を掲げ、園



地形を活かした冒険遊びに没頭

平屋木造園舎

舎の前にはまず園庭を整備することから始めていきました。そして、最後に園舎を建築し、26年に移転開園となりました。

園舎は自然環境の邪魔にならないようにシンプルな平屋木造とし、古民家の縁側をイメージして外と中との連続性が図られるようにしました。そこには、農家の庭先で様々な自然と触れ合いながら遊ぶことを通して「生きる力」を育んできた昔の日本の子どもたちの、たくましく、心豊かな育ちを再現したいという願いが込められています。



大開口により森の風が園舎を抜けていく

真夏は39度、真冬は氷点下10度以下にもなる地域ですが、真冬以外はドアを全開にし、森の風が保育室を通り抜ける構造になっています。また、天井



「森の広場」ではロープを使った遊びのほか、枝、葉、実など自然の恵みだけでじゅうぶんに遊べる

E S D

園庭には様々な野生動物がやってきます。大空にはオオタカが横切り、キジやカルガモ、シラサギ、ノウサギが園庭を散歩し、シマヘビやアオダイショウがシジュウカラを飲み込む光景

にも出会います。夜になるとムササビやフクロウが舞い、深夜にはタヌキ、キツネ、アナグマなどが遊びにきます。棚田には、年長児が育てるたんぼと、親子有志が育てるたんぼがあります。年長児は、種もみ選定から始め、田起こし、あぜ塗り、代かき、田植え、稲刈り、稲架かけ、脱穀、もみすり、精米、火起こし、釜戸炊き、そしておにぎり作りに至るまで、すべての作業に子ども達が古来からの方法で関わっていきます。お米一粒の有り難さ、口に入るまでの苦勞を、この幼児期だからこそ、体験を通して身体に染みこむようにじっくりと時間をかけて伝えていきます。

畑では、園児が土作りから始め、有機栽培で種から育てた野菜はクッキング（調理保育）や給食の材料になります。土作りには様々な堆肥が加わり、園児が家から持参する野菜くず、給食の調理の際にでる野菜くず、稲作後のもみ殻と米ぬか、敷地内の干し草（雑草）、飼育ヤギの糞、近隣の乗馬クラブから園児たちが頂いてくる馬糞等々。こうした活動に主体的に関わることで、土から始まる命の循環と、地域とのつながりを意識することができ

ます。このように、園内外のあらゆる環境を教育資源として捉え、日常の保育に取り入れることで保育が豊かになり、原体験を通して「生きる力」が育まれ



森が園舎、園庭を包み込む

用地購入から4年半、移転開園から1年半が過ぎた現在も、日々出会いと発見の連続です。「ありのままの自然」から学ばせていただくことの尊さを噛みしめながら、今後もこの環境に合った幼児教育を深めていきたいと考えています。

寄稿者紹介

内野 彰裕（うちの あきひろ）
学校法人東京内野学園 理事長
東京ゆりかご幼稚園 園長